夜の病院には不自然な静けさがある。

広大な敷地に反比例して、そこには人間の生活する音、それにつきまとうように沸き起こる種々雑多な背景音が欠け落ちている。
墓地の不気味なまでの静寂とも違う人工的な沈黙が、毎夜繰り返されるのだ。

秋の訪れと共に首筋を撫でるようになった、少し冷たさを感じさせる夜風に襟を立てながら通用口を出てきた男がいた。
警備員に挨拶を交すと表門を目指して歩き出す。

もう三年、か
何年通っても、このビョウインのフンイキって奴には慣れやしない
ヤレヤレ…

帰りに一杯やる店を頭に思い描きながら、銀さんは足を早めようとした。

「ん？」

表門に続くエントランスの途中、中庭の芝生に立つ街灯の下に人影がひとつ。
真っ直ぐに立ったまま動かない。
顔を天に向け、星を見ているようにも見える。だがその表情は厳しく険しい。

「ヨゥ坊や、今夜はこんな時間に天体観測かい？」

空など見える筈が無いのは百も承知で、銀さんはその影…殉に話し掛けた。

「判ってましたよ、銀さん。『声』が聞こえたから。今から飲みにいくんでしょ？」

ゆっくりと顔を降ろし殉が銀さんの方へと向き直った。

この坊やはいつもこうだと銀さんは思った。
目が見えなくとも、相手へ向かい話すのが礼儀だとチャンと知っている。

「ホメてくれるのは嬉しいけど、飲み仲間が待ってるんじゃないですか？」
「そんな事まで『聞く』こたぁないゼ」

銀さんは、ジュンの持つ特殊な力にはもう慣れていた。
照れながら問い返す。

「坊やこそ、こんな時間に何してんだ？　随分キツい顔をしてたぜ」

ジュンの顔から笑みが消えた。

「イヤな…　嫌な感じがするんだ。何だか判らないんだけど」

銀さんの表情も曇った。
殉の予感は必ずと言っていい程当たるのを彼は知っていた。
その時だった。

「っ！！」

殉が耳を押さえて蹲った。

「おいっ？　どうした！」

銀さんは慌てて駆け寄った。

「声が…悲鳴が…聴こえる…ヒドい…」

突然の出来事にうろたえながらも、頭を振って苦しむジュンを彼はしっかり抱きかかえた。

「しっかりしろ！　オイッ！」
「…壊れた…カナちゃんが壊れた…」

小さく痙攣を始めた殉を肩に担ぎ、目を吊り上げた銀さんは今来た道を走りだした。

◇

何も見えぬ、聞こえぬ漆黒の路を加夏子は歩いていた。

灯り一つささない。
そのくせ、時々ボゥと何かが視界の隅をかすめ消えてゆく。

風景であったような
人か獣の姿であったような

恐ろしい程の孤独感が彼女を押し包む。
助けを呼びたくとも、ここには誰も居ない事を彼女は知っていた。
ここは彼女のよく知る場所、永い間つむぎ続けてきた蔦の牢獄だった。

意識する事無く封印してきた忌まわしい記憶。
その扉が開かれた時、加夏子は逃げ出したのだ。
誰も追ってこない、それ故に誰一人居ないこの場所へ。
絶対の安全があった。
それは同時に完全な孤絶をも意味した。
夢中で心の牢獄に逃げ込んだ彼女がそれを理解するには、その心は余りに幼く、繊細に過ぎた。

だれか…
誰かいないの？
ワタシはここよ

パパ、ママッ
センセイ、衣笠さん、銀さん
ケンちゃん
ジュン

どうして誰も返事してくれないのっ？
出して、ワタシを此処からだしてぇー！！

……

叫び声が虚空に木霊する。
正真正銘のひとりぼっちだった。

あてどなく歩き出した。
足許だけが鮮明に見えた。
重く厚く積もった枯葉が、泥田のように続いている。
少しずつ沈み始めていた。
足首から脛、やがて膝までズブズブと枯葉の中に沈み込んでゆく。

やがて歩く事すら出来なくなった。

胸から首まで埋まってしまうと、自由になるものは二つしかなくなった。
見るのと、考えるのと。

加夏子は必死に思いを巡らせた。
大事な何かをうまく思い出せなかった。思考が定まらない。

暫くして人がひとり、こちらに来るのが見えた。
ゆっくりとズームのように、その姿が大きく鮮明になる。

ジュン！

その名前を口にした瞬間、何事も無かったかのように加夏子は路の上に立っていた。
しっかりと堅い路面を、うつ向いて立つ殉に向かって駆け寄った。

ジュン
来てくれたんだね
ワタシ…わたしね…

彼が顔を上げる。
細い目がニヤリと笑った。

『あの男』の顔をした殉は、絶叫する加夏子をメッタ斬りに刻んでいった…

◇

倒れた殉を追うように病院へ搬送されてきた加夏子は、すぐさまERに担ぎ込まれた。
命の灯が、消えかけていた。